

自閉スペクトラム症児の模倣能力と 集団療育場面における社会的コミュニケーション

村上 芽依

【背景】 自閉スペクトラム症 (ASD) 児は模倣能力に困難を抱えているといわれている。このような ASD 児特有の模倣能力を検討するために McDuffie, Turner, Stone, Yoder, Wolery, & Ulman (2007) により考案されたのが、相互交渉の文脈の中で児の自発的模倣能力を測定する方法である。そして、このような模倣能力と彼らの集団療育場面におけるコミュニケーションとの関連について調査した研究は少ない。そこで、本研究は、ASD 児が非 ASD 児に比べて示すことが少ないとされる模倣能力について、他の社会的コミュニケーションスキルとどのように関連しているのか明らかにすることを目的としている。

【方法】 研究は、A 児童発達支援センターにおいて行われた。調査内容は、自発的な模倣能力の測定、遊びに関する行動観察、共同注意への反応に関する実験の 3 つであった。研究協力児は 27 名 (男児 21 名、女児 6 名)、しかし、そのうちの 4 名は模倣の測定ができなかったため、23 名 (男児 17 名、女児 6 名) を分析の対象児とした。自発的な模倣能力の測定には、McDuffie et al. (2007) の方法を一部改変して用いた。実験室には 6 種類の玩具が用意しており、児はそれらの玩具で自由に遊ぶことができた。実験は 6 試行で構成されており、各試行には遊び場面と Trial 場面が含まれていた。遊び場面では児は実験者と自由に遊び、Trial 場面では実験者によってモデル行動が示された。行動観察の方法は個体追跡法であった。集団療育場面の自由遊びの際に示された遊びの種類、遊びにおける交渉相手について 1-0 サンプルング法を用いて記録した。共同注意への反応に関する実験は、視線追跡装置を用いて共同注意への反応が正しく行われているかどうかを調べた。

【結果と考察】 ASD 群と非 ASD 群の模倣能力の得点を比較したところ、ASD 児の方が非 ASD 児よりも模倣能力が低いという結果となった。これは、Stone & Lemanek (1990) などによる先行研究と一致した。ASD 児のなかで模倣行動を一度以上示した児 9 名のグループを総合模倣あり群、示さなかった児 10 名のグループを総合模倣なし群とした。この二群間の比較により、本研究の実験の中で模倣行動を示さなかった児のほうが自閉症状は強く、役割交替遊びを行う児の方が模倣行動を示しやすいということが分かった。自閉度が低い児のほうが模倣行動は多く見られ、模倣行動を示す児は、役割交替遊びも可能になることが示唆される。また、総合模倣あり群となし群における集団療育場面での遊びの特徴を明らかにするために判別分析を行った。模倣の有無で分けた ASD 児が、遊び行動においても異なる特徴をもつこと、2 群を判別する行動指標として、「他児との交渉」「大人との交渉」「ふれあい遊び」が重要であることが示された。

模倣能力を説明する要因を検討するため、目的変数を模倣能力を示す得点とし、説明変数を SCQ の得点 (自閉症状の程度)、新版 K-式発達検査 による認知適応発達年齢 (DA) と言語社会 DA、日本語版 Vineland-II 適応行動尺度の下位領域得点 (コミュニケーション領域、日常生活スキル領域、社会性領域、運動スキル領域)、共同注意 (JA) 得点、RJA 正反応率、遊びに関する行動の生起率としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、模倣能力を示す得点は、説明変数が SCQ のみのモデルが最も当てはまりがよかった。つまり、重回帰分析でも、自閉症の症状が重いほど、ASD 児の模倣能力は低くなることが示された。(比較発達心理学)